

写字生の修正から初期中英語期発音の変化を検証する

狩野 晃一

東北公益文科大学総合研究論集第33号 抜刷

2017年12月20日発行

写字生の修正から初期中英語期発音の変化を検証する¹

狩野 晃一

はじめに—歴史的発音の検証方法

本論文では初期中英語期の北部方言テキストを例にとって初期中英語の言語を研究する際に従来の方法論に加えて他に有効な手段があるのではないかということを示す。またそこから得られた英語史研究に関する諸問題、現行の英語史のあり方を再確認したいと考えている。

私は現在まで英語の発音の歴史²について、とくにイースト・アングリア地域のノーフォーク方言を中心にかなり詳細に調査してきた。ノーフォークのテキストを見てみるとSHALLやSHOULDという語に対する *xal* や *xuld* という奇妙な綴りや、おそらく発音の変化がまさに起こっているのではないかと思えるような例に出会う。³ 例えば古英語 Old English (OE) の子音結合 *-ht* に由来する摩擦音 /ç/ あるいは /x/ がいつ消失し、またその前に位置する母音の音価はいかに変化したのか、などはその一例である。⁴ その中で、従来の発音の検証方法で得られた結果をサポートし、裏付けてくれるような証拠はないかと探し始めたのが、本論のきっかけである。

さて、史的な研究には何かと障害が多く付きまとうのは周知の事実である。例えば、発音の研究であれば、実際の音声ではなく、書かれたものから推定し

¹ 本論は第98回チヨーサー研究会研究発表（2017年3月31日、於 日本大学）にて口頭発表をした原稿に大幅な加筆修正を施したものである。司会を務めていただいた日本大学の杉藤久志先生、質問並びにご意見をいただいた池上昌先生、池上恵子先生に感謝申し上げる。なお、本研究の一部はJSPS 科研費（若手研究（B））15K16775の助成を受けたものである。

² 英語史は一般に、標準英語 Standard English の歴史を指し、またその発音の歴史も当然標準英語の発達を想定して語られてきた。ところが近年、非標準的な英語 non-standard English (es) の歴史も言語史として等しく研究対象にすべきであると言い始めたWatts (2011) や Trudgill and Watts (2001) などの学者も出てきている。

³ SHALL の語頭音 /j/ に対する綴り字 <x> の使用については、狩野 (2015) で詳しく扱った。

⁴ 初期中英語期における OE *-ht* の摩擦音消失についての綴り字からの調査は、Kano (2016) で行なっている。

なければならない。また書かれた資料の多寡は方言によってばらつきがある。初期中英語期の西中部方言には割合に多くのテキストが残されているが、北部方言の現存するテキストは少ない。または年代的なばらつきも存在する。例えば、北部方言のテキストが残存するのは14世紀ごろから多くなる傾向にある。データの均一性が保てないことは、その研究に困難と危険性を与えることを肝に命じなければならない。

我々は残されたテキストからのみ得られる情報を拠り所として、当時の言語状況（発音）を検証し、再現していくことになる。主な検証方法は以下の通りである。

① 異綴り (variant spellings)

テキストに残る綴り字

② 韻律 (prosody / rhyme)

主に脚韻の証拠

③ 正音学的証拠 (orthoepistical evidence)

当時の発音に関する同時代人による言説

①の異綴りは発音検証に対し第一に用いられる証拠で、もっとも重要で直接的な手がかりとなる。各時代により、そして各方言によりそれぞれの綴り字組織があると考えられる。しかしながら、綴り字と発音の相関性の度合いは、一般的にいつて時代が古ければ古いほど強くなることが知られ、より古い時代において綴り字は発音を書き写そうとしていると言われている。例えば、OE *y* が ME *i* に変われば、綴り字は <u> や <y> から <i> へと変化し、ME *e* を表すようであれば <e> と書かれるといった具合である。OE *mynd* > ME *mind* or var. ME *mend* など。ただ難しいのはその綴りが本来テキストが持つ方言音であるのか、あるいはそのテキストを写した写字生の方言音なのかを見極めなければならないという点である。

②の脚韻の証拠は、二行またはそれ以上にまたがる脚韻を調査することによって発音を検証する方法である。難点は少なくともいくつかあるが、そのうちのひとつは時代が進んでも、古くからある脚韻のペアを踏襲する傾向があり、

実際の音価がわかりづらいことがあるのと、もう一点は見かけ上、脚韻を構成しているけれども実はあっていないものがある。これを視覚韻 (eye rhyme) と言うが、近代英語以降よく見られ、love : prove や far : war、glow : brow などがあり見かけに騙されてはならない。脚韻による音価の検証は特に視覚韻が起こる15世紀以前には極めて有効であると言う(小野・中尾, 1980)。また類韻 (assonance) の可能性であるとか色々とし約がある。韻文の言語は一般に制作年代よりも古い言語特徴を残していることが多いことから、特定の時代の音韻資料として用いるには注意が必要となる。

③正音学的な言説については初期中英語期の言語状況については皆無であるため、これは省く。⁵

以上の3点が主な歴史的音韻推移の検証方法であるが、本論においてこれら従来の方法に加えた視点が、写字生による修正という事象である。これは後期中英語期を扱ったDaniel Wakelinによる著書 *Scribal Correction and Literary Craft: English Manuscripts 1375–1510* から、写字生による修正を初期中英語期の発音変化の検証にも用いられうるのではないかと着想を得たものである。Wakelinは「修正は写本を読む人によってなされるよりもはるかに書き手によってなされる。そして工芸品(写本)を扱う多くの人にはそれをあまり理解していないが、作ったの方がよほど理解している」⁶ といい、後期中英語期の写字生の態度を「一語一語正確に再現しようと努め、習慣的な綴り方をしようとし、不明瞭なことがないように、全ての音節において正確であろうとしている」⁷ と評している。写字生が手本 (exemplar) と異なるように書き写してしまうとき、それ自体が言語情報となることもある。特に変化の激しかった1400–1700年ごろ

⁵ ここに挙げた項目のみを調査すれば良いわけではなく、事態はより複雑である。すなわち、現存するテキストの性質を考慮に入れながらこれらの証拠を吟味しなければならないだろうということだ。写本に収められている作品は、その原著者によって書き残されている場合は極めて稀であり、コピーのコピー(の、そのまたコピー)であるのが普通であると考えられる。これが示すところは、何層にも渡って言語が重ねられている可能性があるということであり、その状況を想定しなければ原著者の言語、(複数の)写字生の言語について判断を誤りかねない。しかも初期中英語期のテキストは往々にして1作品について1写本しか残っていない。仮に同一作品に対して複数の写本が残っているとすれば、比較対照が可能になり、作品の原形や作者の言語、写字生の言語などが浮き彫りとなる。例えば *Ancrene Wisse* や *Katherine Group* の諸聖者伝など、*Cursor Mundi* など、かなり詳細な研究、複雑な言語の層を突き止めることが可能となる。

⁶ Wakelin(2014: 10)を参照。

⁷ Wakelin(2014: 3)を参照。

の英語に現れる表音的な綴り字、それをH. C. Wyldは臨時綴り (occasional spelling) と言ったが、⁸ これと同様の価値がみとめられることもあろう。それを単なる写字の誤りだ、と断ずることもできるだろうが、その判断は難しい。しばしば、その「誤り」と思われる綴りに写字生は「修正」を加えるのだ。

写字生の修正（種類と意味）について

写字生の修正を扱う前に、写字にはいかなる誤りがあるのだろうか。最も頻繁に起こる誤りとしては飛ばし読み (eye-skip) や重複誤写 (dittography) などがある。また手本にある語順を違えるなどの誤りもよく見られる。

それでは誤写に対する修正はどのように行われるのか。まず修正を加える者は誰なのか。Kerby-Fulton, Hilmo and Olsonは*Opening Up Middle English Manuscripts*の中で「修正はしばしば「注釈者の仕事」であったと述べ、「注釈者=修正者 (‘annotator-corrector’)」について「見出しを書く係 (‘rubricators’)」とは異なる一般的に組み合わされた役割であると言及していると述べている。⁹ このことは写本作成において一般的に理解されていることである。しかしながらKerby-Fultonらの意見に対し、Wakelinは「英語で書かれた写本を作る時には、あまり一貫した共同作業がなされなかった。意外なことではないが、多くの修正が書いた本人によってなされていた (much correcting was done by the scribe himself) (下線部は筆者による)」と言っていることは注目されるべきだろう。¹⁰

修正方法については、削除と挿入が最もよく行われるものである。削除においては消去 (erasure) と文字の下に点を打つ (subpunctionまたはexpunction)、あるいは文字上に横線を引いて消す、または誤って書かれた部分を削り取るなどの方法がある。

また加筆／挿入 (addition/insertion) という方法を取る場合、挿入記号 ^ や // ときに /、あるいはa, b, c...などのアルファベットを用いて、当該箇所へ挿入

⁸ 臨時綴り字は特に初期近代英語の母音の音価を推定する最も有効な資料としてZachrisson (1913), Wyld (1936) などによって用いられている。ただ、臨時綴り字は伝統的綴り字を誤って記憶した結果生まれたものとも考えられるため、証拠として用いる際には注意が必要である。

⁹ Kerby-Fulton, Himo and Olson (2012: 208, 214) を参照。

¹⁰ Wakelin (2014: 7) を参照。

するように指示をする。単に該当箇所の行間に書き込むこともあれば、より広い余白部分 (margin) に書くこともある。¹¹

写字生による修正・挿入と言語検証

本セクションでは具体的な例を挙げ、写字生の修正が言語検証にどれほど有効であるかを以下で示していきたい。ここでは Edinburgh Royal College of Physicians, MS of *Cursor Mundi*¹² から用例を採る。

Edinburgh Royal College of Physicians : MS of *Cursor Mundi* は 13 世紀後期から 14 世紀初期 (C13b2–C14a1) の間に写されたと考えられており *Cursor Mundi* は未完で間違った順序で収められている。¹³ 筆写には 3 人の写字生が関わっており、それぞれ Hand A: ff. 1r-15v, Hand B: 16r-36v, Hand C: 37r-50v である。方言は Yorkshire と特定され、*Linguistic Atlas of Late Mediaeval English* (LALME) では Hand B の言語は LP 375 で、Hand C の言語は LP 14 で詳細に記述されている。¹⁴ *A Linguistic Atlas of Early Middle English* (LAEME) では #296 (Hand C)、#297 (Hand A)、そして #298 (Hand B) として分類されている。本論では LAEME のデータを使用して調査を進める。

コーパス情報は以下の通りである。

296 (Hand C): Edinburgh, Royal College of Physicians, MS of *Cursor Mundi*,
fols. 37r-50v: C13b(460 452) York

297 (Hand A): Edinburgh, Royal College of Physicians, MS of *Cursor Mundi*
fols. 1r-15v: C14a(486 447) North East Reading Yorkshire

¹¹ Clemens–Graham (2008: 35-48) が最近の中世写本学の参考書では詳しい。

¹² *Cursor Mundi* の刊本は EETS より R. Morris の編集で出ている (EETS os. 57, 59, 62, 66, 68, 99, 101)。これは BL, Cotton Vespasian A iii, Oxford, Bodleian Library, Fairfax MS. 14, Göttingen MS. theol. 107 そして Cambridge, Trinity College, MS. R. 3.8 の 4 写本を平行に並べたもので、Edinburgh 写本は第 3 巻の Trinity 写本 21601~21846 行目を補うために加えられている。Edinburgh 写本情報については第 7 巻「諸写本と方言に関する論考」を書いた H. Hupe に詳しい (Vol. VII, pp. 62-63 を参照)。

¹³ Laing (1993: 53) ff. 37r-50v, ff. 1r-15v そして ff. 16r-36v には *Northern Homily Collection* のプロローグと最初の 13 項目が加えられている。

¹⁴ LALME, vol. I, p 88、Laing (1993: 54) を参照。LP 375 については LALME, vol. IV, pp. 570-71、LP 14 は LALME, vol. IV, pp. 605-606 に言語データが示されている。なお、それぞれの写字生の言語は LALME の地図上では位置の特定はされていない。

298 (Hand B): Edinburgh, Royal College of Physicians, MS of *Cursor Mundi*,
fols. 16r-36v: C14a (455 476) North Reading Yorkshire
(Extracts from the Northern Homily Collection)

*LEAME*において、挿入は >> という記号の間に入れて記述されている。例えば、<v>が挿入されているのであれば >T>、<3>(yogh)が挿入されていれば >g>と表記される。本論文内では挿入部分は全て ` ` で表すことにする。

<h>の挿入

本論では摩擦音、破裂音を扱うこととする。この北部方言（ヨークシャー方言）テキスト中で摩擦音は消えているのかどうか。もし<h>という文字が初めにかかれず、後から付け加えられる挿入されるということであれば、消失していた可能性、あるいは筆写した写字生の言語、または手本になかった可能性のいずれかを示しているに違いない。

<h>の挿入は、#298に3例見られる。HERE という場所を表す副詞が *'h'er* と綴られる例が1例。 *'h'ir* と綴られるのが1例そしてHEREON という副詞が *'h'er_on* と綴られるのが2例確認される。

いずれも語頭にcoming <h>が抜けていたものを補った形です。OE *-ht* という子音結合に置ける摩擦音が修正、挿入されている例は北部方言では見られなかった。では<h>以外で摩擦音を示しうる文字ではどうであろうか。例えば<3>に関しては、語頭、語中、語尾のいずれの環境においても、北部方言テキストで挿入された形跡はなかった。

綴り字上で摩擦音の消失を示しうる<h>が脱落しているものは#298に多く見られる。

#298 *hey*t 'HEIGHT (n.)' 1x, *in sy*t 'INSIGHT (n.)' 1x, *ry*t 'RIGHT' 1x, *thot* 'THOUGHT' 1x,
not 'NOT = NOUGHT' 1x

しかしながら、例えば RIGHT に対して#298の写字生B (Hand B)が通常用いる綴りは *riht* (46x: adj., av., and n.)で、他の語も<h>が入った形が一般的と言える。

一風変わった綴り字はNot (< OE *nā wiht*) に対する *nost* で <s> が入っているが、発音は /nɔst/ ではなく、この <s> という文字は摩擦音を表していると考えられる。¹⁵

<t>の挿入

無声破裂音を表す <t> の挿入も次に示す。#296 (Hand A) と #297 (Hand B)、つまり *Cursor Mundi* の部分には、語末の <t> が後から付加される例が数多く見られる。以下に例を示す。

#296 *pa* `t` 'T_{HAT}' 1X, *taʒ* `t` 'T_{AUGHT}' 1X, *wi* `t` `e` 'W_{ITAN}' 1X (3 times in total) .

#297 *pai-pa* `t` 'T_{HAT}' 1X, *i* `t` 'I_T' 1X, *hih* `t` 'H_{IGHT} = called' 1X, *moh* `t` 'M_{IGHT}' 3X, *noh* `t` 'N_{OUGH}' 4X, *rih* `t` 'R_{IGHT}' 1X, *boh* `t` 'T_{HOUGH}' 1X, *wi* `t` 'W_{ITH}', *wroh* `t` 'W_{ROUGH}' 1X. (12 times in total)

Cursor Mundi の ff. 1r-15v 部分には語末の <t> が後から加えられている場合が多いことが一目瞭然である。これらの挿入がどのような環境で行われているかを知ることは、写字生の言語そしてその習性を知る手掛かりにつながると思われる。14例ある <t> 挿入のうち、5例が脚韻部分で用いられている。

- (1) Al sal torn again til noht
Als *pai war first ar pai war wroh* `t`

- (2) *Ban paintid fire gain ouris moh* `t`
Bat apona wah war wroht

- (3) *Pai sal knaw baþe þi ded a boh* `t`
Bot þar-for vnderstand þou noht

- (4) *Selcuþe kenli cuþe he fiht*

¹⁵ <st> の綴りは Anglo-Norman の書記法に見られる綴り方で、Pope によれば <s> は摩擦音を表しているという (Pope, 1952: §1178 を参照)。

He sloh þe king þat Harald hih`t`

(5) Apon þe norman³ forto fiht

þat wan þe land wit-outinrih`t`

これらの例を見てみるとカップル（対）になっている脚韻語は必ず<þ>が正確に書き写されているにも関わらず、*moh*のように初め書かれ、のちに<þ>が挿入されるのが常である。つまり最初に書き写した時には脚韻語として認識されていた可能性が低いことを表しているのではないか。興味深いのは脚韻語の両方で<þ>が抜け落ちていることは一切なく、どちらか一方のみの欠落であるという点である。

脚韻部以外の環境ではどのようになっているのだろうか。後続音の影響を受けて /t/ が脱落するかどうかを検証する必要もあるだろう。行中において<þ>に続く語の語頭音との組み合わせを調査すると、以下の例が見られる。

(6) noh`t` se

(7) noh`t` men

(8) þai-þa`t` wald

(9) noh`t` murne

(10) i`t` war

(11) noh`t` hir

(12) wi`t` staf

(13) moh`t` I

(14) moh`t` in

およそ音の連続する様子を観察してみると /s/ に続く例は(6)と(12)、/m/ に続くのは(7)と(9)、/w/ に続くのは(8)と(10)、そして /i/ あるいは /i:/ に続く例は(13)と(14)（あるいは(11)の*hir*は /h/ ではなく /i/ または /i:/ の環境に属するかもしれない）に見られる。もちろん *miht me* や *wroht me* など挿入の必要なく初めから正確に書き写されている場合がほとんどであることを断っておかなくてはなら

ない。

いずれにせよ、<ɥ>が挿入される時には多くの場合OE *-ht*に由来する語に多く現れることがわかる。実に14例中、10例がこの音環境にある。

もし綴り通りに発音する、発音されていたならば/i(:)ç/あるいは/u(:)x/となるはずだが、脚韻では/i(:)çt/または/u(:)xt/と考えられるので、発音の再建は一筋縄ではいかない。であれば何故このような綴りで書いたのだろうか。この箇所を写した写字生の言語において語末の/t/が脱落しやすかったのではないかと考えられる。

同じ写本に収められている#298 *Northern Homilies Collections*の写字生 (Hand C) にも<ɥ>が挿入されているいくつかの例がある。#298で<ɥ>の挿入は以下の5つの例に見られる。

#298 *pa* 'ɥ' 'T_{HAT}' 1x, 'ɥ'o-' 'T_O' 2x, 'ɥ'o-day' 'T_{ODAY}' 2x, 'ɥ'il' 'T_{ILL}' 1x (6 times in total)

これらのうち語頭の<ɥ>を付加している例、つまり'ɥ'o-, 'ɥ'o-day, 'ɥ'ilについては行頭、文頭で、飾り文字のために開けられたスペース (2行分) の横にguide letterとして補われているものである。このような純粹に言語学的な特徴とは言えないものも含まれている場合もあるので、注意が必要である。写字生Cがこの箇所<ɥ>を後から加えた理由はいくつか考えられるのであって、例えば何も考えず手本が*pa*であったためそのように写した。あるいは手本が*pa*と書いてあったが、それをT_{HOSE}やT_{HEN}という意味に解釈して写した。または写字生C自身のT_{HAT}の発音が/θæt/ではなく/θæ(?) /であった等々の可能性も視野に入れるべきかも知れない。

<d>の挿入

有声破裂音を示す字母<d>の挿入を調査すると、北部方言で書かれたテキストではその挿入の仕方に2種類の型が見られる。一つは語中に<d>を挿入するものと、語尾に<d>を挿入する場合がある。

#298ではA_{ND}とG_{OD}の2語が<d>挿入の対象となっている。A_{ND}の方は*LAEME*

には ‘D squeezed into space between the words’ とあり、AND の<d>を書く前に次の語 *pai* を書き始めてしまい、慌てて<d>を挿入したことがわかる。#298のコーパスにおいてG_{OD}は127例見られる。そのうち*godd*で綴られるものが80例で、残りは<d>が一つだけのものである。G_{OD}に似ており、しばしば混同される語G_{OOD}の例を見てみると、83例が発見されるが、1例のみ*godd*であとは*god*と一つだけ<d>がつけられたものである。すなわち二重字の<d>を持つ場合は先行する母音が短いこと、単体<d>は先行母音が長いことを示すおおよその指標になっていたと考えられる。

#296のANDとFOLLOWの進行形*folwan`d`*の語末の<d>が挿入の対象となっている。これは全て環境としては/n/のあとに期待される/d/歯茎破裂音が消えているというものである。ANDがanとなるのはさほど珍しいことではなく、13世紀(から17世紀)のテキストにはよく見られるものである。

まとめにかえて

修正(今回は挿入が主であるが)を受ける語はおおよそ決まっていて、それはよく使われる語である場合が多い。特に<h>が後から挿入されている事実は、Hand Bが手本をなるべく忠実に写しているにもかかわらず、時に自分のあるいはその当時、その写字生の周囲で聞かれる発音を偶然にも表している可能性もある。さらに*ryt`RIGHT`*や*thot`THOUGHT`*など<h>が回復されてしかるべき箇所に挿入・修正がないことは、少なくともその写字生にとって摩擦音なしの発音が不自然ではなかったと解釈できる一つの証拠となりうる。¹⁶ 同様に、語末の<h>がしばしば挿入された理由、反対に言えば、<h>が初めに写した時に写字生が何故写し忘れたのか、このことを考えることが重要であろう。上に挙げたわずかな例からも、従来の発音検証方法に加えて写字生の修正(とりわけ同一写字生による修正)は非常に有効な手段となることが明らかである。

今一度、正字法のない初期中英語期における「綴り字」と「発音」の関係につ

¹⁶ 以前は<h>を元来持っている語から<h>が抜けた場合、また母音で始まる語に余分な<h>を付加する場合には、その写字生はノルマン系の写字生だろうということが言われていたが、それは考えにくい。というのも、少なくともこの写本を書いた写字生は14世紀前後の人であって、おそらく当時純粋なノルマン系の写字生はすでにいなくなって久しいからだ。同様のことはClark(1992)も言っている。

いて考えてみる必要があるように思われる。「綴り字」にphonological representationというよりは、書き手の実際の発音（phonetic representation）が偶然にも現れてしまったと考えることもできるのではないだろうか。<ɥ>の例を音声的に説明すれば実際に<ɥ>を発音しづらい環境にあたりして脱落したり、あるいは声門閉鎖音（glottal stop）のようなものであったりした可能性を排除できないのである。中世の写字生が声門閉鎖音を使わなかった、とはいえないのだ。実際に生きて言語活動をしていた人間としての写字生という視点を持って良いのではないかとも考えられる。

さらに今回のような言語資料（*Cursor Mundi*という長大な百科事典的作品）を用いて研究する過程で出てきた問題に言及しておくことも意味があるだろう。まず、ある方言で書かれたとされるテキストはその方言を代表することができるか、という問題である。現存するテキストが現在われわれの手元に残っている割合、または失われてしまったテキストの数をわれわれは知ることができない。確かに*Cursor Mundi*のようにおおよそ同様の言語で書き残され、複数の写本が存在するテキストは、その地域の方言の一端を示しているといえよう。しかしながら、現存テキストにある言語の複層性などを考慮に入れば素直に代表的な形であるとは言えまい。こういった共時的な問題を含む。

同時に、また時代間の比較をするときのテキストの量、テキストを写した写字生の修正を同列に扱って良いだろうか。例えば*Cursor Mundi*は14世紀の北部方言全テキスト総語数中95%以上を占めており、¹⁷ その中に3人の写字生による近似しているが、異なる言語が内在している。

そのようなわけで、ある方言の特徴という時には、実は特定のテキストに見られる、あるいは、あるテキストの特徴を引き継ぎつつ、別の写字生が彼自身の言語を意識的にせよ無意識にせよ反映した結果であるということに常に留意しなければならない。このようなことに直面する時、本論の始めて言及した今までの標準英語へ収斂させていくような英語史のあり方を考え直す必要があるように思われる。

¹⁷ 堀田隆一「#1263. The LAEME Corpus の代表性(2)」『Hellog~英語史ブログ』を参照 (<http://user.keio.ac.jp/~rhotta/hellog/2012-10-11-1.html> (2017年9月30日アクセス))

Selected Bibliography

- Bischoff, Bernhard. translated by Dáubhí ó Cróinín – David Ganz. 1990. *Latin Palaeography: Antiquity & the Middle Ages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clark, C. 1992. ‘The myth of “the Anglo-Norman scribe”’. In Rissanen, M., et al, (eds.) *History of Englishes: new methods and interpretations in historical linguistics*. Topics in English Linguistics 10. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.
- Clemens, Raymond – Timothy Graham. 2008. *Introduction to Manuscript Studies*. Ithaca: Cornell University Press.
- 狩野 晃一. 2015. 「<X>の謎 – OE *sc* に対する中英語期の異綴りを巡って」『チョーサーと英米文学 河崎征俊教授退職記念論集』東京：金星堂, pp. 347–357.
- Kano, Koichi. 2016. “Observations on Dialectal Forms and Standardisation in the Vernacular Texts of Late Medieval Norfolk” 『東北公益文科大学総合研究論集: Forum 21』第29号, pp. 39–54.
- LAEME*: Laing, Margaret – Roger Lass (comps.). 2007–. *A Linguistic Atlas of Early Middle English, 1150–1325*. Edinburgh: University of Edinburgh. Available online at <http://www.lel.ed.ac.uk/ihd/laeme1/laeme1.html>.
- Laing, Margaret (ed.). 1993. *Catalogue for the Linguistic Atlas of Early Middle English*. Suffolk: D. S. Brewer.
- LALME*: McIntosh, Angus – M. L. Samuels – M. Benskin, with M. Laing – K. Williamson. 1986. *A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English*. Aberdeen: Aberdeen University Press.
- MED*: Kurath, H. – S. M. Kuhn – J. Reidy (eds.). 1952–2001. *Middle English Dictionary*. Ann Arbor: University of Michigan Press.
- Morris, Richard (ed.). 1874–1893. *Cursor Mundi: Four Versions*, VII vols. EETS os. 57, 59, 62, 66, 68, 99, 101. Oxford: Oxford University Press.
- 小野 茂、中尾 俊夫, 1980. 『英語史 I』英語学大系〈第8巻〉. 東京：大修館書店.
- Pope, M. K. 1952 (2nd ed.). *From Latin to modern French with especial consideration*

- of Anglo-Norman: phonology and morphology*. Manchester: Manchester University Press.
- Tagliamonte, Sali A. 2012. *Roots of English: Exploring the History of Dialects*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Trudgill, Peter – Richard J. Watts. 2001. *Alternative Histories of English*. New York: Rutledge.
- Wakelin, Daniel. 2014. *Scribal Corrections and Literary Craft: English Manuscripts 1375–1510*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Watts, Richard J. 2011. *Language Myths and the History of English*. New York: Oxford University Press.
- Wyld, H. C. 1936(3rd ed.). *A History of Modern Colloquial English*. Oxford: Basil Blackwell.
- Zachrisson, R. E. 1913. *Pronunciation of English Vowels 1400–1700*. Göttingen: Wald-Zachrisson.